The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語の主格主語と対格主語の照応形束縛現象に関する研究
Author(s)	田儀, 勇樹
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2018, 2017, p. 31-40
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/69875
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

日本語の主格主語と対格主語の照応形束縛現象に関する研究*

田儀勇樹

1. はじめに

日本語の ECM 構文は、(1)のように、埋め込み節に対格を付与された主語を伴った構文である。

(1) 太郎は花子を馬鹿だと思っている。

本稿では、(1)のような日本語の ECM の特徴を、Hiraiwa(2001, 2005)のデータをもとに概観した上で、主格の照応形を含んだ関係節に修飾された名詞句が、ECM 主語である場合と、主格を付与された埋め込み節の主語である場合とで、束縛現象における差異が生ずることを確認する。本稿の目的は、この照応形束縛での差異に対し、田儀(2017)で提案された照応形束縛に関する一般化の理論的考察を行うことを目指す。本稿での理論的考察として、Takahashi(2010)の格付与を行う主要部がフェイズを形成するという説と、照応形はスペルアウト領域で束縛されなければならないとする、Charnavel and Sportiche(2016)の説に従い、田儀(2017)で提案された一般化は、Takahashi(2010)と Charnavel and Sportiche(2016)の理論によって導き出すことができると主張する。

本稿での議論は次の通りに進める。第 2 節では、日本語の随意的上昇分析の先行研究として、Hiraiwa(2001,2005)を概観する。第 3 節では、日本語の照応形束縛の特徴について概観し、日本語の照応形は埋め込み節の主語であっても主節の主語からの束縛が可能であるという事実を確認する。第 4 節では、田儀(2017)で提案された日本語の照応形束縛に関する一般化とその応用を概観する。第 4 節での田儀(2017)の一般化の理論的考察は、第 5 節で行う。

2. 日本語の ECM への随意的上昇分析:(Hiraiwa2001, 2005)

*本発表は 2017 年 11 月 25 日に立命館大学衣笠キャンパスで開催された「日本言語学会第 155 回大会」での口頭発表内容に加筆修正を加えたものである。発表当日には多くの方々からご助言をいただいた。特に、斎藤衛先生(南山大学)、宮本陽一先生(大阪大学)、越智正男先生(大阪大学)から今後の研究を進めていく上での貴重なご助言をいただいた。心より、感謝申し上げたい。本稿における不備・誤りは筆者の責任である。

本節では、日本語の ECM の随意的上昇分析に基づいた先行研究として、Hiraiwa(2001,2005)を概観する。Hiraiwa(2001,2005)は(2)-(3)のデータから、日本語のECM主語の主節への上昇は随意的であると結論づけている。

(2) a. ジョンが[$_{CP}$まだメリーが/を子供だと]思った。
b. ジョンが[$_{CP}$メリーが/をその仕事に向いてないと]思った
c.ジョンが[$_{CP}$その仕事に$_i$メリーが/をt_i向いてないと]思った。 (Hiraiwa2001:72)

Hiraiwa(2001)は、(2a)の ECM 主語が「まだ」という、埋め込み節の述部である「子供だ」を修飾する副詞に後続して生起することができており、(2b)のように、「その仕事に」よりも前に位置している ECM 主語が(2c)のように、「その仕事に」に後続することができる点を指摘した。

さらに Hiraiwa(2005)は、名詞句と否定極性表現の違いにより、ECM 主語が主節へ上昇できる場合と、上昇できない場合が観察されることを指摘している。

(3) a. 彼らは全員太郎(のこと)を馬鹿だとも思わなかった。
b. 彼らは太郎(のこと)を全員馬鹿だとも思わなかった。
c. 彼らは全員誰(のこと)を馬鹿だとも思わなかった。
d.*彼らは誰(のこと)を$_i$全員t_i馬鹿だとも思わなかった。 (Hiraiwa2005:165)

(3)での数量詞「全員」は主節の主語である「彼らは」を修飾しており、主節に位置している。Hiraiwa(2005)は、「太郎」のような通常の名詞句はこの「全員」よりも ECM 主語の前置が可能で、否定極性表現の「誰」は前置できないことから、日本語の ECM 主語の主節への上昇は随意的であると述べた。

(3)でのデータに加え、Hiraiwa (2005) は 、Kuno (1976) で 指摘された(4)のような、ECM 主語が主節の動詞を修飾する副詞に前置されるデータにおいても、ECM 主語が「 誰を 」になると、(5)のような差異が生ずることを指摘した。

(4) 山田は田中を愚かにも天才だと思っていた。 (Kuno 1976:25)

(5) a. 太郎は愚かにも誰(のこと)を馬鹿だとも思わなかった。
b.*太郎は誰(のこと)を$_i$愚かにもt_i馬鹿だとも思わなかった。 (Hiraiwa2005:165)

(4)のように「田中を」のような通常の名詞句では、ECM主語は「愚かにも」よりも前置する事が可能である。一方、(4)とは異なり、「愚かにも」に「誰を」が後続した語順である、(5a)は文法的である一方、(4)と同様に、「愚かにも」に対し、前置した語順である(5b)は非

文である。Hiraiwa(2005)は否定極性表現の認可の条件として、「否定極性表現は、構造がインターフェイスに転送される段階で、「も」によって C 統御されなければならない」という条件を提案し、(3d)や(5b)の非文性は、否定極性表現が、主節に上昇したことにより、「も」が否定極性表現を C 統御できなくなり、否定極性表現の認可条件に違反しているからであると結論づけた。(2)と(3)と(5)のデータより、Hiraiwa(2001, 2005)は、日本語の ECM 主語が埋め込み節に残留する事例や、主節に上昇する両方の事例が観察されることから、日本語の ECM 主語の主節への上昇は随意的であると主張した。

3. 照応形束縛

第 2 節では Hiraiwa(2001,2005)の随意的上昇分析を概観し、Hiraiwa(2001,2005)でのデータをもとに、日本語の ECM 主語の主節への上昇は随意的であることを確認した。第 3.1 節では、日本語の主語の照応形束縛について、概観し、日本語の照応形が埋め込み節の主格であっても主節の主語からの束縛を受けることができることを確認する。第 3.2 節では Hiraiwa(2001,2005)で概観したデータをもとに、日本語の ECM 主語が埋め込み節に生起している現象をもとに日本語の束縛現象を考察する。

3.1 埋め込み節の主語に対する照応形束縛

まず、日本語の照応形主語の束縛について概観する。Nishigauchi(1992)によれば、(6)のように、日本語では照応形は埋め込み節の主語であっても主節の主語から束縛されること指摘されている。

(6) ジョンとメリーが[お互いがビルを責めたと]思った(こと)。

(Nishigauchi1992:159)

また、埋め込み節の主語は主格主語、ECM 主語のどちらも主節の主語から束縛を受けることができる。

(7) a. 太郎と花子が $_i$お互いが $_i$馬鹿だと思った。
b. 太郎と花子が $_i$お互いを $_i$馬鹿だと思った。

(7)のどちらの照応形も主節の主語によって束縛されており、(7)の文からは照応形束縛においては双方ともに差異がないことが確認される。

3.2 照応形束縛と関係詞節に修飾された主語の名詞句

日本語では、(8)-(10)のように、関係節を伴った名詞句が埋め込み節の主語として生起することができ、また、その主語の名詞句が主格であっても対格でも文法性に問題は生じない。

(8) a. 太郎は花子が批判した誰を賢いとも思わなかった。
b. 太郎は花子が批判した誰が賢いとも思わなかった。 (田儀 2017)

(9) a. 太郎はまだ花子が雇った新入社員を未熟だと思った。
b. 太郎はまだ花子が雇った新入社員が未熟だと思った。 (*ibid*)

(10) a. 太郎はその仕事に花子が雇った新入社員を向いていないと思った。
b. 太郎はその仕事に花子が雇った新入社員が向いていないと思った。 (*ibid*)

第 3.1 節では主節の主語が埋め込み節の照応形主語を束縛できることを確認したが、本小節では田儀(2017)での指摘をもとに、日本語の照応形束縛において、関係節に含まれた照応形主語が主節の主語によって束縛される場合と束縛されない場合を観察する。

Nishigauchi(1992)での指摘と、ECM 主語の振る舞いより、照応形束縛において、日本語の埋め込み節の主語は主格でも対格でも、主節の主語によって束縛されるという一般化を導き出すことが可能になる。この一般化が妥当であるとすると、(11)-(13)のように、関係節の主語を照応形に変えると、(a)の文でも(b)の文でも主節の主語による照応形主語の束縛が可能になることを予測する。

(11) a. 太郎と花子が $_i$お互いが $_i$批判した誰を賢いとも思わなかった。
b.*?? 太郎と花子が $_i$お互いが $_i$批判した誰が賢いとも思わなかった。 (田儀 2017)

(12) a. 太郎と花子が $_i$まだお互いが $_i$雇った新入社員が未熟だと思った。
b.*??太郎と花子が $_i$まだお互いが $_i$雇った新入社員が未熟だと思った。 (*ibid*)

(13) a. 太郎と花子が $_i$その仕事にお互いが $_i$雇った新入社員を向いていないと思った。
b.*??太郎と花子が $_i$その仕事にお互いが $_i$雇った新入社員が向いていないと思った。
(*ibid*)

しかしながら、(6)のデータから導き出された一般化に反し、(11)-(13)では、それぞれ(b)において、主節の主語が照応形主語を束縛することができない。

(11)-(13)のデータより、対格を付与された主語を修飾する関係節と主格を付与された主語を修飾する関係節とでは、照応形束縛において、差異が生ずることを確認した。

4.　一般化と他の構文への応用

本節では、日本語の関係節の構造について、Murasugi(1991)に従い、日本語の関係節は、CP でなく、TP である構造を採用し、議論を進める。その上で、田儀(2017)での一般化と他の構文への応用を概観する。

4.1　日本語における関係詞節

本小節では、日本語における関係節の構造として、Murasugi(1991)を概観する。

(14)　a.　the reason$_i$ [(why$_i$) [Mary thinks [that John left e_i.]]]
　　b.*メリーがジョンが e_i 帰ったと思った理由 $_i$　　(Murasugi1991:141)

Murasugi(1991)では、英語の関係節では(14a)のように、「the reason」が「think」の埋め込み節の「e_i」との依存関係を結ぶことが許される一方、日本語では(14b)のように、「理由」は「思った」の埋め込み節内の「e_i」との依存関係を結ぶことができないということが指摘されている。Murasugi(1991)は、(14)の対比を(15)の構造で分析している。

(15)　a.　[$_{NP}$ the reason [$_{CP}$ (why$_i$) [$_C$ C$_i$ Mary thinks][$_{CP}$ that John left e_i]
　　b.*[メリーが[[ジョンが e_i 帰った]と]思った理由]　　(Murasugi1991:148)

Murasugi(1991)は、(15a)は「think」の補文節の CP 内に基底生成された、「e_i」が関係節の CP 指定部の「why」と C 主要部が指定部・主要部の一致を行い、その C 主要部によって「e_i」が認可されると分析している。その一方、もし日本語の関係節が英語と同様の構造(15a)をしているとするならば、(14b)の事実に反し、(15b)の構造により、(14b)の「理由」が「思う」の埋め込み節の「e_i」と依存関係を形成できることを予測してしまう。しかしながら日本語の関係節が TP であると仮定すると、英語では、「e_i」を関係節の C 主要部が認可していたが、日本語にはその「e_i」を認可する C が関係節に存在しないことにより、(14b)の非文性を正しく説明することができると述べている。(15)での英語と日本語の関係節の構造的差異より、日本語の関係節の構造は CP でなく、TP であるという説を採用し、議論を進める。

4.2　日本語の照応形束縛に関する一般化

田儀(2017)では、(7a)と、主格を伴った複合名詞句とを比較し、日本語の照応形束縛に関する一般化を提案した。(7a)と(12b)を(16)で再掲し、これら 2 つの文を改めて比較検討する。

(16)　a.　　太郎と花子が $_i$お互いが $_i$馬鹿だと思った。

b.*??太郎と花子が $_i$まだお互いが $_i$雇った新入社員が未熟だと思った。

(16)で、(16a)は、主格の主語が埋め込み節の主語の 1 つだけである一方、(16b)では主格の主語が、埋め込み節の主語と、関係節内の2つが存在することが確認できる。(16)での対比より、田儀(2017)では、日本語の照応形の束縛における一般化として、(17)を示した。

(17)　照応形束縛(日本語):
先行詞はガ格を付与する TP を 2 つ以上を超えて照応形を束縛することはできない。
(田儀 2017)

(17)は、関係節を伴った名詞句が他動詞の目的語として生起した場合、その中の照応形が主語によって束縛されることからも支持される。

(18)　太郎と花子が $_i$ [$_{vP}$ [$_{DP}$ [$_{TP\text{-}NOM}$お互いが $_i$買った] 本を] 読んだ。v]

(18)において先行詞である「太郎と花子が」は、関係節内の照応形を束縛しているが、関係詞を束縛する際、主格を付与する TP を 1 つ超えているだけである。
(17)の一般化に基づいて(7)と(12)の文を考察すると、(19)-(22)の構造になる。

(19)　主格照応形
a.太郎と花子が $_i$お互いが $_i$馬鹿だと思った。
b.太郎と花子が[$_{vP}$ [$_{CP}$ [$_{TP\text{-}NOM}$ [$_{DP}$お互いが　] T] C] v]

(19)では、主節の主語と照応形との間には、主格を付与する TP が 1 つだけ介在している。(17)より、主節の主語は照応形を束縛する際、主格を付与する TP を 1 つだけ超えているので、束縛が可能になる。

(20)　対格照応形
a.太郎と花子が $_i$お互いを $_i$馬鹿だと思った。
b.太郎と花子が[$_{vP}$ [$_{CP}$ [$_{TP}$ [$_{DP}$お互いを　]T] C] v]

(20)では、ECM 主語であるため、埋め込み節の TP は主格を付与しない。これにより、主節の主語が照応形を束縛する際、主格を付与する TP が存在しないため、照応形を束縛する事ができる。

(21)　関係節(対格主語)

a.太郎と花子が $_i$まだお互いが $_i$雇った新入社員を未熟だと思った。

b.太郎と花子が[$_{vP}$ [$_{CP}$ [$_{TP}$ まだ[$_{DP}$ [$_{TP\text{-}NOM}$ お互いが雇った]新入社員を]未熟だ T]C]v]

(21) は、主格を付与する TP が関係節の TP のみであるため、主節の主語は照応形を束縛する事ができている。

(22) 関係節(主格主語)

a.*?? 太郎と花子が $_i$まだお互いが $_i$雇った新入社員が未熟だと思った。

b. 太郎と花子が[$_{vP}$[$_{CP}$[$_{TP\text{-}NOM}$[$_{DP}$[$_{TP\text{-}NOM}$ お互いが雇った T]新入社員が]未熟だ T]C]v]

(21)とは対照的に、(22)では、主格を付与する TP が埋め込み節の TP と関係節の TP の 2 つ存在している。主節の主語が照応形を束縛する際、2 つの主格を付与する TP を超えているため、(17)より、主節の主語は照応形を束縛することが不可能になる。

(19)-(22)の議論より、日本語の照応形束縛において、主節の主語は照応形を束縛する際、2 つ以上の主格を付与する TP を超えてはならないことを確認した。

4.3 間接疑問文

第 4.2 節で、日本語の照応形束縛において、主節の照応形は 2 つ以上の TP を超えて束縛できないことを確認した。(17)の一般化は、関係詞を伴った名詞句が間接疑問文の主語であるときに、その関係詞に含まれた照応形が、束縛できないということを正しく予測する。日本語の間接疑問文では、埋め込み節の主語が主格であることが要求されているからであり、このことは、Takeuchi(2010)で指摘されている。

(23) a. 太郎は[$_{CP}$[$_{TP}$ 花子が馬鹿]か] 訊ねた。

b.*太郎は[$_{CP}$ 花子を[$_{TP}$ 馬鹿] か] 訊ねた。 (Takeuchi2010:115)

実際に、照応形を含んだ関係節を伴った名詞句が間接疑問文の主語として生起した場合、主節の主語が関係詞の主語は束縛することができない。

(24) a. 太郎は花子が雇った新入社員が賢いか訊ねた。

b.*??太郎と花子が $_i$お互いが $_i$雇った新入社員が賢いか訊ねた。

Takeuchi(2010)での間接疑問文の構造が正しいとすると、(24b)は(25)のような構造をしていると考えられる。

(25) 太郎と花子が[$_{vP}$ [$_{CP}$ [$_{TP\text{-}NOM}$ [$_{DP}$ [$_{TP\text{-}NOM}$ お互いが雇った T]新入社員が]賢い T]C]v]

(25)の構造から、主節の主語である「太郎と花子」と「お互い」の間には間接疑問文の TP と関係節の TP が介在しており、どちらも主格を付与している。(17)の一般化から、主節の主語が照応形を束縛する際、2 つの主格を付与する TP を超えているため、(17)より、主節の主語が照応形主語を束縛することが不可能になることを正しく導き出すことができる。

5. 理論的考察

第 4.2 節での議論で、日本語では、先行詞が 2 つ以上の主格を付与する TP を超えて照応形を束縛することができないという一般化が認められることを確認した。本節では、(26)により、(17)の一般化を理論的に導き出すことができると主張する。

(26) a.照応形はスペルアウト領域内で束縛されなければならない。
(CharnavelandSportiche2016)
b.格を付与する主要部はフェイズを形成する。 (Takahashi2010)

(26)に従い、主格主語と対格主語との差異を改めて分析する。(27)-(30)で、第 4.2 節の文の構造を再掲した。

(27) 主格照応形
a.太郎と花子が $_i$お互いが $_i$馬鹿だと思った。
b.[$_{TP}$太郎と花子が $_i$ [$_{vP}$ t_i [$_{VP}$ [$_{CP}$ [$_{TP\text{-}NOM}$ [$_{DP}$お互いが]T]C]v]V]T]

(27b)で、(26b)より、フェイズとなるのは、主節の TP と埋め込み節の TP である。(26b)より、主節の TP がフェイズであるので、vP、VP、埋め込み節の CP と TP は主節の TP にとってスペルアウト領域である。照応形主語は、主格を付与する埋め込み TP 指定部に位置しているが、この位置はフェイズ指定部である。主節の主語が主節の TP に併合した際、フェイズが完成し、vP 以下がスペルアウトされる。この時、フェイズ指定部に位置する照応形主語は、スペルアウト領域内で、主節の主語による束縛が可能になる。

(28) 対格照応形
a.太郎と花子が $_i$お互いを $_i$馬鹿だと思った。
b.太郎と花子が $_i$ [$_{vP}$ t_i [$_{VP}$ [$_{CP}$ [$_{TP}$ [$_{DP}$お互いを]T]C]v]V]

一方、(28b)の ECM では、フェイズは主節の TP、vP である。主節の vP に主語が併合した時、vP のフェイズが完成し、埋め込み節の CP と TP がスペルアウト領域となる。埋め込み

節の TP は格を付与しないため、フェイズとはならず、埋め込み TP 指定部に位置する ECM 主語は、主節の vP に併合した主語によって、束縛される。

(29)　関係節(対格主語)

a.太郎と花子が $_i$まだお互いが $_i$雇った新入社員を未熟だと思った。

b.太郎と花子が[$_{vP}$ [$_{CP}$ [$_{TP}$ まだ[$_{DP}$[$_{TP\text{-}NOM}$ お互いが雇った]新入社員を]未熟だ T]C]v]

(29b)において、フェイズを形成しているのは、主節の vP と関係節の TP である。埋め込み節の CP と TP はスペルアウト領域となる。vP 指定部に主節の主語が基底生成した時にフェイズが完成する(cf. Charnavel and Sportiche 2016)。この時、主節の VP、埋め込み節の CP、TP がスペルアウト領域となる。ECM の埋め込み節の TP は格を付与しないことから、フェイズとならないことと、関係節の主語はフェイズ指定部に生起していることから主節の vP にとってのスペルアウト領域に残っている。これにより、vP に生起した主語による照応形への束縛が可能となることを導き出すことができる。

(30)関係節(主格主語)

a.*??太郎と花子が $_i$まだお互いが $_i$雇った新入社員が未熟だと思った。

b.　[$_{TP}$ 太郎と花子が $_i$[$_{vP}$ $_{ti}$[$_{VP}$[$_{CP}$[$_{TP\text{-}NOM}$[$_{DP}$[$_{TP\text{-}NOM}$ お互いが雇った T]新入社員が]未熟だ T]C]v]T]]

一方、(30b)において、フェイズとなるのは、主節の TP、埋め込み節の TP、関係節の TP である。(29b)での分析と同様に、フェイズである主節の TP が完成したときに、スペルアウトが行われるとすると、スペルアウト領域は、主節の vP、VP、埋め込み節の CP と TP である。主節の主語から関係節の照応形主語まで、埋め込み節の TP と、関係節の TP の 2 つの TP が介在する。(26a)より、これらの TP はどちらも主格を付与するのでフェイズを形成する。照応形主語が、主節の TP にとってのスペルアウト領域の一つである、埋め込み節の TP 指定部に含まれていないために、主節の主語による束縛が不可能になるということを正しく導き出すことができる。

6.　結語

本稿では、Hiraiwa(2001,2005)での「日本語の ECM 主語の主節への上昇は随意的である。」という主張に従い、日本語の ECM 主語が埋め込み節に留まっている環境下で、照応形を含んだ複合名詞句の束縛現象を主格と比較することにより主格の主語と対格の主語では照応形束縛の振る舞いにおいて差異が生ずることを確認した。また、これらの差異を説明すべく、田儀(2017)で提案された(17)の一般化を概観し、(17)が他動詞の目的語が関係節を伴っている場合や、間接疑問文の主語として生起した場合においても有効であることを

確認した。また、第 5 節では、(17)の一般化が(26a)と(26b)によって導き出すことが可能であるということを主張した。本稿での議論により、日本語の照応形束縛がフェイズとそのスペルアウト領域によって決定づけられると主張した。

参考文献

Charnavel, Isabelle and Dominique Sportiche (2016） Anaphor binding: What French inanimate anaphors show. *Linguistic Inquiry* 47: 35–87.

Hiraiwa, Ken (2001) Multiple agree and the defective intervention constraint in Japanese. :In Ora Matushansky and et al (eds.) *Proceedings of the 1st HUMIT student conference in language research (HUMIT 2000)*, Vol. 40 of *MIT working papers in linguistics*, 67–80. Cambridge, Mass. : MITWPL.

Hiraiwa, Ken (2005) Dimensions of symmetry in syntax: Agreement and clausal architecture. Doctoral dissertation, Massachusetts Institute of Technology.

Kuno, Susumu (1976) Subject raising. In: Masayoshi Shibatani (ed.) *Japanese generative grammar*, *Syntax and semantics 5*, 17–49. New York: Academic Press.

Murasugi, Keiko (1991) Noun phrases in Japanese and English: A study in syntax, learnability and acquisition. Doctoral dissertation, University of Connecticut.

Nishigauchi, Taisuke (1992) Syntax of reciprocals in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 1: 157–196.

田儀勇樹 (2017)「日本語における例外的格付与構文と複合名詞句内に含まれた照応形への束縛に関する研究」日本言語学会第 155 回大会口頭発表．立命館大学衣笠キャンパス, 2017 年 11 月 25 日.

Takahashi, Masahiko (2010) Case, phases, and nominative/accusative conversion in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics* 19: 319–355.

Takeuchi, Hajime (2010) Exceptional case marking in Japanese and optional feature transmission. *Nanzan Linguistics* 6: 101–128.